

経済原論〈G05B〉

配当年次	1・2年次
授業科目単位数	4
科目試験出題者	高島 浩之
文責(課題設題者)	高島 浩之
教科書	指定 富塚 良三『経済原論』[簡約版]以降(有斐閣)

《授業の目的・到達目標》

経済体制が維持されるためには、生産財と消費財が毎年規則的に生産され、経済活動に不可欠な労働力が正常な形で再生産されていることが必要である。

資本主義経済では、生産財と消費財の再生産が資本の運動を介して達成される。この生産財・消費財の継続的生産が如何になされているかの解明を通して、資本主義の経済構造とその運動法則を理解する。

《授業の概要》

仮に誰も働かなくなってしまうとすると、言いかえるとあらゆる労働が停止したとすると、人類はたちまち死滅してしまうということは、誰にでも分かることである。この自明のことをはっきりと認識することが経済学の出発点となる。人間は絶えず自然に働きかけ、自然を人間の生存に適したものに作りかえ、自然の果実を消費することによって生きている。この活動がすなわち労働であり、労働は人類生存の基本条件なのである。

ところでその労働は、人間にとってどういう意味を持つものであろうか？ アダム・スミスという人は『諸国民の富』という経済学の最初の古典を書いた人として有名であるが、そのスミスは労働を人間が財貨を得るためにその代償として支払わなければならない「労苦と骨折」と定義した。何か「効用(utility)」を得るために負わなければならない「非効用(disutility)」というように定義する経済学者たちもいる。労働がそういう面を持っていることは確かであろう。特に或る一定時間以上働かされるとなると、本当に労働というものはいやなものである。しかし、労働というものは、もともとそういうものであろうか？ それがなくしては生きていけないが、それなしに生きられたら極楽だというようなものにすぎないのだろうか？ そうではない、労働は本来は人間にとってもっと積極的なそして本質的な意味を持っているのだ、と答えた人がいる。それがもう一人の偉大な経済学者カール・マルクスである。マルクスという人は資本主義社会をひっくり返すことを専門にしていた人だということに思って、毛嫌いする人も多いのだが、しかし案外健康な考え方をする人であったように思う。人間とか社会とかについて深く根本的に考えるという点では、アダム・スミスなどよりも優れていたといえる。そのマルクスは、労働について次のように言っている。すなわち、人間は労働することによって動物と区別される存在に、人間的存在になるのだと。これは新鮮な響きを持つ言葉であり、思想ではないか。彼の言うところをもう少し詳しく聞いてみよう。

マルクスは、人間の労働は三つの特色をもっているという。第一には、動物の本能的な所作と異なって人間は何か目的を意識した労働を行う。例えば、大工が家を建てる場合、まずその家を設計する。つまり、建築労働に取りかかる前に、彼はまずどういう家を作るかを頭の中に思い描く。頭の中で家を建てる。そうしてから、建築労働の結果として家が出来る。このように、はじめに目的として設定し意識したものが

労働の結果として出てくる。これを目的意識性というように言うが、これが人間労働の第一の特色である。蜂や蜘蛛は下手な大工や機織りが赤面するほどうまく巣を作るが、巣を作る蜂や蜘蛛の本能的な（自然の営みの一部であるにすぎない）所作とくらべて、人間の労働が優っている点は、目的意識的だという点にある。こうマルクスは論ずる。人間の労働の第二の特色は、道具とか機械とかそういうような物——これを労働手段というが——を、作りそして用いるという点にある。人間が立って二本の足で歩き始めると、前肢が手になる。ここから、人間の自然からの独立が始まる。道具はこの手の延長であり、それのさらに発展したものが機械である。こういう道具やその発展したものである機械を、人間は自分で作りそして用いる。これが人間の労働の第二の特色である。人間は素手で自然に働きかけるのではなく、労働手段を使って自然に働きかけるのである。いろいろな機械などの労働手段を作ったり、その労働手段を使って、自然に働きかけたりすることは、自然が持っている、或いはそのさまざまな営みを支配している法則を意識的に利用するというにほかならない。これを技術という。人間労働の第二の特色は、言いかえると、技術性があるということになる。目的を実現するために自然の諸法則を利用する。こういう労働の営みの中で、人間は次第に自然から独立して人間的存在になってゆくのだというのがマルクスの考えである。第三の特色は、人間の労働は何らかの形で社会的労働として行われる、というところにある。ここがばらばらにではなく社会的に組み合わせさせた形で、労働する、すなわち自然に働きかける。この社会的労働を通じてこそ人間は社会的存在になるのだ、というのがマルクスの考え方である。こういう三つの特色を持った労働によって、人間は自然を絶えず作りかえると同時に人間自身を作りかえてゆく。人間はそれ自体自然の一部であるが、その自分自身の自然のなかに眠っている諸能力が労働そのもののなかで目覚め発展してくる。労働というものは本来はそういうものであった。その労働が資本主義的な経済システムのもとでは、その本来のものと違ったものになる。極言すれば人間が「生きた労働用具」となる。それがどうしてであるか？ こういうように問題を立て、これを順を追って解き明かしてゆくのが経済学という学問であり、その基礎理論を説くのが、「経済原論」である。

《学習指導》

経済原論を学ぶ者は、資本主義経済の歴史的運動法則の解明を課題とした理論家たちの学説にも関心を持つ必要がある。経済学説史として、アダム・スミス、リカード、マルサス、マルクス、J.S. ミルなどの思想に興味・関心をもてば、経済原論の課題を明確に自覚することができる。

《成績評価》

試験（科目試験またはスクーリング試験）により最終評価する。

経済原論〈G05B〉

- ◎課題文の記入：必要（課題記入欄に課題文を書き写すこと）
- ◎字数制限：1 課題あたり 2,000 字程度（作成基準のとおり）

第1 課題

商品の価値が、不変資本＋可変資本＋剰余価値から構成されていることを説明しなさい。

第2 課題

労働日は必要労働と剰余労働を含み、両者の比率が剰余価値率となることを論じなさい。

第3 課題

単純再生産表式を用いて貨幣還流の法則を論じなさい。

第4 課題

生産力の発展が資本構成を高度化させ、それが利潤率に低下傾向を与える理由を説明しなさい。

〈推薦図書〉

鶴田 満彦

『入門経済学』〔新版〕（1990 年）

有斐閣

北村 洋基

『現代社会経済学』〔改訂新版〕（2013 年）

桜井書店